
モノクローム・ワールド

柊 雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクローム・ワールド

【Nコード】

N0808S

【作者名】

柊 雪華

【あらすじ】

宮田沙耶が思いを寄せている紺野裕輔は、既に妻を持つ身。好きだという気持ちを押し殺し続けた沙耶に、裕輔の異動の話が入り……。

「お、出た出た。内示」

内示。その言葉に、沙耶は身を固くした。

毎年三月は人事異動の季節。毎年この時期になると、誰がこの部署に異動になりそうだ、などといった話題で持ちきりになる。

宮田沙耶は採用初年度ということもあり、異動の話はまったく出ていない。地元出身の沙耶としてはこれはこれで嬉しい事である。はずだったが、現実はそのもいかない。

「おおつ、紺野さん三課じゃないですか！」

「え、三課ってあのエリート部署ですよ？」

若手2人の声上がり、更に身を固くする沙耶。

「紺野さん三課じゃないですか！」

その言葉は、沙耶にとっては死刑宣告に等しいものだった。

「三課」というのは通称であり、正式には「営業部第三課」。職員達の中でも精鋭揃いと評判の、本社の部署。本社は東京にある。つまり、本社に行くためには電車を何度も乗り継ぎしなければいけないということになるのだ。その距離はあまりにも遠すぎた。

もう、何年後に再会できるかさえも分からない状況。

そんな現実を受け入れたくないがために、少しでも頭を横に振る。そう、子供がイヤイヤをするかのように。僅かに赤みを帯びた、長い黒めがちな髪が揺れる。視界が涙で揺れる。

隠さなきゃ。沙耶はそう自分に言い聞かせ、パソコンに向かい、作成していた書類と再び格闘を始めた。しかし身が入らない。頭がぼんやりする。

「いえ、エリート部署だなんて」

キャビネットの前で大きなバインダー片手に苦笑する長身の男は、

今しがた話題に出た紺野裕輔。沙耶より9つ年上の28歳。

「そういえば奥さんは総務の…」

裕輔には同じ会社に勤める妻がいた。同じ社内においても、顔をあわせることはほとんどない部署ではあるが。

初出勤から三日。新人歓迎会するとき、緊張でガチガチになっていた沙耶の隣にいたのが紺野である。

初めての「飲み会」の空気に緊張して、せっかくのご馳走にも手をつけられずにいた沙耶。もちろんお酒も飲めないで、ちびちびとウーロン茶を飲むばかりである。そんな彼女の前にある空っぽの皿に、薄切りのローストビーフを数枚綺麗に盛り付けてやり、「遠慮しないで食べてもいいんですよ？」

紺野は笑顔でそう声をかけたものだった。

「え……えっと」

「ああ僕、紺野です。紺野裕輔」

「こんの、さん、ですか」

「はい。宮田さんと同じ課です。ただ僕は宮田さんと担当が違いますけど。話す機会がなかったからわからなかったでしょう」

更に言葉が続け、自信をなくしかけていた沙耶の緊張を、一瞬で解いてしまった。

「大丈夫ですよ、小さい事務所ですから、すぐに誰が誰かわかるようになります。仕事もそうそう難しくはありませんから、身構える必要もないです」

「……ありがとうございます」

嬉しくて、ふと微笑むと。

「宮田さん、やっと笑いましたね」

ドキッとした。そんなに細かいところまで観察されていたのか、と。同時に、そこまで気をかけてもらえていることが嬉しくて。引っ込み思案で高校時代も上手く他人と接することができなかった沙耶が、そんな裕輔に恋するのも自然なことだった。

その宴会から、ほんの二ヶ月後。

仕事帰りに、たまたまロッカールームで裕輔と二人きりになった。何か話すことはないか、それも、仕事以外のことで。必死で思考回路を繋ぐ沙耶に裕輔が声をかけてきた。

「あの、宮田さん」

「はっはい！」

まさか声をかけてもらえるとは思わなかったから、返事をする声が裏返ったものである。

しかし、声だけでなく彼女の期待さえも裏返しにってしまうような言葉が待ち受けていた。

「僕、来月の22日に結婚式挙げるんですよ」

同時に手渡された白い封筒には、裕輔の文字ではない実に丁寧な楷書体で「宮田沙耶様」と表書きされている。

「……おめでとうございます」

半ば放心状態で、形式的に、儀礼的に祝いの言葉を述べた。裕輔はもちろん沙耶の心中など知る由もなく、照れくさそうに微笑む。

「あの、紺野さん。この字は……」

「封筒の字ですか？ 僕の……妻の字です」

それが決定打となった。妻、というからにはもう既に婚姻届も出されているのだ。

「そうだったんですか。なんだか、優しそうな字ですね」

要領を得ない返事なのはわかっていているが、他に何も言いようがなかった。「結婚」の二文字が、自分の想像以上に重く、重くのしかかっている。

裕輔が沙耶に「愛しい」だとか「抱きしめたい」だとか。そのような感情を持つことなど決してありえなくなった瞬間だった。

それでも沙耶は気丈な娘である。

何事もなかったように仕事をこなし、何事もなかったように裕輔

の結婚式に参加し、自らの心の痛みを押し殺しながら彼の幸せを見届けた。笑顔で。誰も、沙耶の胸のうちを知るものはいなかったし気づくものもいなかった。彼女は全てを胸にしまって、一人になつてからこつそりと涙を流していたのだから。

3月31日。異動する職員の最後の出勤日。

「……さん、宮田さん」

「は、はい！」

例のファイルを持った裕輔が、沙耶に声をかけてきたのだ。そこでようやく、沙耶は現実に取り戻される。

「仕事の引継ぎをしますから、僕の席まで来てもらえますか？」

「……わかりました」

そう。これが現実。裕輔がここからいなくなる。それが現実。

「……さて、引継ぎはこんなところですかね。駐車場のカードの扱いは特に気をつけてください。駐車場を使う方にも伝えておいてください」

「はい」

裕輔がいなくなる分の穴は自分が埋める。その使命感だけでどうか沙耶は動くことができていた。そうでなければ、こんなに集中して引継ぎなどできなかっただろう。

年度末になると、3月31日までに課長の判をもらわなくてはいいけない書類が増える。沙耶は食事を取らずにパソコンに向かい、ひたすらに文字を打ち込んでいた。もっとも、食事を取らなかったのには食欲がわかなかつたからというものもあるが。それほどまでに、沙耶には「異動」の2文字が大きいのしかかっている。

「では、僕はこれで」

裕輔の一挙手一投足に集中しながら、今日中に仕上げなくてはいい

けない書類を情性でまとめていく沙耶の耳にそんな言葉が入ってた。声の主は……裕輔。

「東京でも頑張ってくれよ」

「はい」

課長の言葉にすっかり頷くと、裕輔が事務所を出て行くとする。たまらず沙耶は席を立ち、裕輔のあとを追いかける。

「こ……紺野さん！」

勇気を振り絞ってその名を呼んだのはいいのだが、その先につながる言葉が見つからない。

「どうしました？ 引継ぎの件でわからないことでもありましたか？」
いつもどおりの口調があまりにも痛く心に突き刺さってくる。どう言葉を続ければいいか。

「あの……もう出発されるんですか？」

「ええ。向こうでの業務引継ぎもありますからね。電車の時間まではまだ余裕がありますけど」

裕輔がいなくなるのは明日ではない、今日だったのだ。

嫌だ、私の前から消えないで。あなたのことが好きだから……
そう言えたなら、胸のつかえは取れたかもしれない。でも、なかなか沙耶は言葉をつむげない。

「どうか、しましたか？ 宮田さん……泣いてるじゃないですか」

その言葉にびくんと身体を引きつらせる。無意識で涙を流していた、ようなのだ。絶対に裕輔の前では泣かない。そう決めていたのに。

「な、なんでもないんです！ 私……仕事に戻ります、その……今までありがとうござ……」

その言葉は最後まで言わせてもらえなかった。額にふわりと柔らかな感触。それが裕輔の唇だと理解するには、かなりの時間を要した。

「あ……」

「とつくに気づいていましたよ。気持ちに伝えられなくて、申し訳

ないとずっと思っていました」

裕輔にはすべてお見通しだったのだ。最初に言葉を交わしたときの彼の観察眼の鋭さを、沙耶はすっかり忘れていたのだ。

「今のキスで、許してもらえますか」

やはり、何をどう言えばいいか、わからない。ただ涙だけがひたすら流れ、何か言葉をつむごうとした唇は金魚のようにぱくぱくと動くだけ。

「許すなんて……勝手に好きになったのは、私ですから」

すると、言うてはいけない言葉を口にしてしまう。ああ、もうこれで何もかもが終わりだ……。絶望に打ちひしがれる沙耶。
やがて、

「それでは、僕は時間ですから……」

きびすを返す裕輔に、やはりかける言葉はなく。内履きのまま玄関に駆け出ると同時に、裕輔の運転する車が去っていく。

季節外れの雪が、頬を伝う涙に溶けていく。音のない、そこだけスローモーションがかかったような、雪。一陣の風が沙耶の髪を撫でていく。

「……風なんかじゃ、嫌」

声を絞り出すと、ふわりと白く形になる。

「キスよりも、私は……」

髪を撫でていく風。静かな、雪。

——髪を撫でていくのが、風でなく、紺野さんの手ならばよかったのに。そうしたら、こんなにも心は痛くならなかったのに。

沙耶は内履きなのも気にせず、誰にも見えないような場所に陣取り、ポケットからカッターを取り出した。カチカチ。刃を出し、そっと手首に刃先を這わせる。

ぼたり、と音を立てて、赤いものが白い雪に落ちていく。

すっかり覚えてしまったこの行為。心が痛くてたまらないなら、
身体も傷つけてしまえ。

白の中にできた赤い雫の跡が、滲んでいく。沙耶の世界がモノクロームになっていく。もう、誰も彼女を癒すことはできなかった。

（後書き）

3月31日といえば人事異動。というわけで、さくつと書き上げてしまいました。

本当は何年も書きかけ放置プレイでしたが……。

えっと、結局何が言いたいんだって話になっちゃいましたね、すみません。

読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0808s/>

モノクローム・ワールド

2011年8月13日03時31分発行